

菅原美子先生を偲ぶ

名古屋大学環境医学研究所神経性調節分野

水村 和枝

菅原美子先生は去る平成17年10月1日にくも膜下出血で倒れられ、同4日にご逝去されました。享年58歳という若さでした。ご葬儀は7日にご家族、職場関係者、生理学女性研究者の会会員などの見守りの中で静かに行われました。ご長男が最後のご挨拶で述べられた「母は輝いて生きていました」という言葉が、先生のご生涯を良く物語っていると思います。お子さん達にとって良いお母様であっただけでなく、先生は生理学会の女性研究者にとって、心強い、頼りがいのある存在でした。多くの生理学会女性研究者に代わってお悔やみの言葉を述べさせていただきます。

菅原先生は、中学生の頃より生物教師になりたいと希望し、東京学芸大学理学部に入学されました。そこで研究のおもしろさにめざめてさらに修士課程に進まれ、松井喜三先生のもとで伊勢エビを材料に心臓神経節におけるリズム形成の研究をされました。その後、できたばかりの帝京大学医学部生理学教室の小原昭作前教授のもとで助手となり、ゴンズイの電気受容機構の研究を開始されました。先生は知りたい現象にもっともふさわしい実験動物を使うのが大事と、現在では少なくなってしまう比較生理学的な視点を持って、一貫して聴覚や魚類側線器と系統発生上の起源を同じくする電気感覚について、電気受容機構及び中枢神経系での情報処理機構を中心に組織学的・電気生理学的手法を用いて研究を続けて来られました。1970年から1980年後半にかけて、電気受容器の受容器電位がCa²⁺依存性であること、聴側線器系には共通の受容機構があることを明らかにされています。その後、1992年にはフランス国立科学研究センター神経生理学研究所に留学され



ています。その時は、お二人のお子さんのうちご長男をご夫君に預け、4歳のご次男を連れて留学されています。「朝、子供を保育園に預け、研究室に行き、6時にお迎えして、時には子連れで研究室にもどったりと、Grant教授（受入先教授で女性）の協力を得ながら、充実した日々を送り、人生の至福の時を感じる毎日でした」と、そのときのことを振り返って生理学女性研究者の会のニュースレターに書いておられます。そこでは弱電気魚モルミルスの脳幹スライスを作り、電気感覚の二次ニューロンの細胞内記録をおこなうことに四苦八苦されましたが、研究はその後、アメリカ・ポートランドのBell博士との共同研究に発展して行きました（この成果はNature 387 (1997) やJ Neurosci. 404 (1999) 等に報告されています）。フランスのグループとの共同研究はその後もずっと続き、毎年のようにフランスにで

かけたり、フランスから学生を受け入れたりされてきました。また、ご夫君の理解と家事分担のおかげもあったことと思いますが、お子さん達を立派に育てあげられ、フランス留学の時4歳であったご次男は現在18歳、ご長男は既に医学部を卒業して医師として働いておられます。お二人とも菅原先生を母として誇りに思っていてくれる、と菅原先生は喜んでおられました。

このような研究生活のなかで、菅原先生は女性研究者の研究環境改善のためにいろいろな活動をされてきました。10年前の1994年には、半場道子先生（当時昭和大学）や小野寺加代子先生（当時東京大学）とともに生理学女性研究者の会（WPJ）を立ち上げられました。WPJは生理学会の女性研究者のネットワークとして、女性研究者の交流をはかり、時にはロールモデルを示し、時には会員相互がメンターとして働いてきました。菅原先生はそのなかで初めの6年間は庶務等の役割を引き受けて基盤づくりに尽力され、2001年よりは代表として、WPJを率いてこられました。また、2001年にWPJの活動の上に発足した男女共同参画推進委員会の委員になり、いろいろな場面でWPJとの橋わたしをし、協力していただきました。現在実施されているアドバイザー制を発足させるに当たり、2004年6月の札幌大会の時にそのモデルとなったメンター制についてのワークショップを委員会とWPJが合同で実施できたのも、菅原先生がWPJとの間に立ってくださったおかげです。先生は行政側の男女共同参画や人材育成の動きについての情報もきちんと把握しておられ、またいくつもの女性研究者の会を見てこられたため、判断は慎重かつ適切でした。私は男女共同参画推進委員会委員長として、委員会発足以来ずっと菅原先生に対して最大の信頼を寄せてきました。この2年ばかりは乳ガン手術、その後の化学療法など、体調がおもわしくないことも多かったはずですが、以前と変わらずに活動を続けられました。そして、平成18年3月の生理学会前橋大会における委員会の企画シンポジウム「男女共同参画の過去・現在・そして未来に向けて—その2：任期制と人材育成をめぐる最近の動向」で

はオーガナイザーを引き受けてくださっていました。「演者をそろそろきめなくてはね」というのが先生から頂いた最後のEメールとなっただけで、とても残念です。

そのほか、菅原先生は日本女性科学者の会でも活躍され、その学術年報の編集委員をされてきました。また今春3月には和光市の理化学研究所で、日本女性科学者の会等が主催する文科省女性の社会参画支援促進事業シンポジウム「科学・技術分野で女性研究者が活躍するための4つの条件」というシンポジウムに準備委員の一人になり、生理学会における男女共同参画推進の活動（ネットワーク作り）を紹介する場を作ってください、またパネルディスカッションの司会もされました。

菅原先生はこのように家庭では子供達のやさしい頼りがいのある母であったばかりでなく、子供達に輝いていると見えるほど生き生きとした研究生活をされてきました。家庭と研究とその両者を立派にやっただけでも、時間はいくらあっても足りないほど忙しかったにちがいないと推察します。その上さらに先生が日本女性科学者の会や生理学女性研究者の会で活動を続けてこられたのは、女性が家庭をもちながらももっとのびのびと研究ができる社会にしたい、正當に評価される社会にしたいという強い希望があったからだと思います。先生の希望が少しでも実現するよう努力することを誓いつつ、心よりご冥福を祈ります。

略歴

昭和45年3月 東京学芸大学教育学部卒業
昭和47年3月 同理学研究科修士課程修了（理学修士）
昭和47年8月 帝京大学医学部第一生理学助手
昭和57年4月 同講師（現在まで）
平成元年 理学博士
平成4年9月から5年8月まで
フランス国立科学研究センター
神経生理学研究所上級研究員
平成6年2月から3月まで
Robert S. Dow Neurobiological
Science Institute 客員研究員
平成12年10月～ 日本学術会議第18期動物科学
研究連絡委員会委員